



文部科学省  
国立教育政策研究所  
National Institute for Educational Policy Research

※最新版を、<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf09.pdf> から、直接にダウンロードできます。

# 生徒指導リーフ

*Leaf over the theory and practice on Seitoshidou!*

## いじめの未然防止Ⅱ

*Leaf.9*

生徒指導・進路指導研究センター

# いじめに向かわない児童生徒

いじめを減らしていく上で成果を上げているのが、「いじめを生まない」という未然防止の発想に立った取組です。

そうした未然防止の取組の一つに、多くの児童生徒がいじめ加害を行った体験があるという事実に立ち、児童生徒一人一人が"いじめなんて、くだらないよね"と言えるように育つことを促す、"絆づくり"の発想の取組があります。

いじめの背景には児童生徒のストレスやその原因となる要因（ストレッサー）等が存在しますが、そんなものには負けない、そのはけ口として他者を攻撃するようなまねはしない、と言える児童生徒に育てば、いじめは減ります。

それには、人と関わることを喜びと感じる体験が不可欠です。面倒だったり、イヤなこともあったりするけれど、他の人と関わることは楽しいし、役に立てたらうれしいと感じる場や機会をつくることで、加害者になるのを防ぎます。

- ◆大半の児童生徒が、被害者にはもちろん、加害者にもなった体験があるという事実から出発する。
- ◆早期発見・早期対応の取組や、加害者・被害者を特定したり予見したりしようとする取組の限界を理解し、未然防止に取り組む。

## いじめの背景にある「友人関係」

誰もがいじめに巻き込まれて被害者にも加害者にもなりうるということは、全ての児童生徒が加害者にならなければ被害者もいなくなることを意味します。人間関係のトラブルを回避し、プレッシャーをはねのけられる児童生徒に育つことが大切です。

### 他者と関わる体験を

全ての児童生徒に充実した集団体験を提供する — 今の児童生徒の生活体験や社会体験の乏しさは、単なる知識やスキルの提供では追いつかなくなっています。

トラブルが起きることも含めて集団というものを受け入れ、かつトラブルを回避するために自分はどうすべきかに気付くこと、また集団内の他者から認められる喜びに気づき、最終的には自ら進んで他者や集団に貢献することが誇りになること — そうした集団体験を確実に提供していくことが、いじめに向かわない児童生徒に育つことにつながります。

そのためには、日々の授業をはじめとする学校生活のあらゆる場面において、他者と関わる機会を工夫していくことが必要になってきます。

## “絆づくり” \* でいじめを減らす

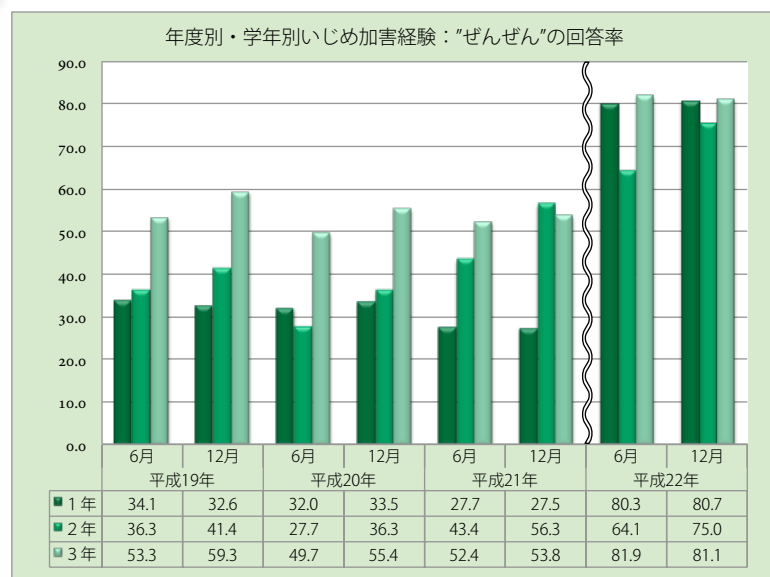
主体的に取り組む共同的な活動を通して、他者から認められ、他者の役に立っているという「自己有用感」\*を児童生徒全員が感じとれる“絆づくり”を進める（そのための場や機会をつくる）ことができれば、いじめに向かう児童生徒は減ります。

### 例えば…

いじめや不登校、暴力行為等に悩んでいたA中学校区では、平成21年度に校区内の二つの小学校が児童の「自己有用感」を育てるために、「異年齢交流」に取り組みました。6年生が1年生を迎える会を開く、給食の準備や片付けを手伝う、読み聞かせをする、清掃活動を縦割り班で行う、縦割り班で集会活動や運動会を行うなどの活動を、年間計画に位置付けて実施したのです。

ここで大切なのは、「何をした（させた）のか」ではなく、「誰の」「何を」育てるために「どのように」取組を行ったのかです。6年生の自己有用感が高まることを期待し、それが実現するようにお世話活動が実施されました。交流が主目的ではなく、6年生が育つ機会となるように実施され、教師の声かけもそれを促すようになされました。

6年生時にしっかりと育ち、他者との関わりに自信を持つことができ、卒業時の不登校（長期欠席）も減りました。すると、翌平成22年度に中学校1年生になってからのいじめや不登校、暴力行為等も大きく減りました。（下図には、いじめを「しなかった」割合の推移が示されています）



例年（平成19～21年）、いじめを「しなかった」と回答する割合が3学年中で最も低かった1年生が、平成22年には、3年生に匹敵する割合に変化した。

また、不登校や暴力行為についても、同様に大きく減った。

出典：国立教育政策研究所生徒指導研究センター『校区ではぐくむ子どもの力』2011年6月

◆授業や行事の中で全ての児童生徒が活躍できる場面をつくりだし（“絆づくり”のための場づくり）、彼らの「自己有用感」が高まれば、いじめには向かわない。

\* “絆づくり”については、『生徒指導リーフ2「絆づくり」と「居場所づくり」』を、「自己有用感」については、『生徒指導リーフ18「自尊感情」？それとも、「自己有用感」？』を参考にしてください。

参考資料：国立教育政策研究所生徒指導研究センター『生徒指導支援資料3「いじめを減らす」』平成23年6月 <http://www.nier.go.jp/shido/shienschiryu/index.html>

## ★ワンポイント・アドバイス★

### 活動の組み方と働きかけ方が、「自己有用感」育成の鍵！

他者から認められている、他者の役に立っているという「自己有用感」を、児童生徒全員が獲得できるような集団体験を提供していくためのポイントを押さえておきましょう。

当該学年の児童生徒全員が他者から認められる喜びに気づき、最終的には自ら進んで他者や集団に貢献することが誇りになるためには、同学年内の体験だけでは限界があります。「学び合い」や「支え合い」をどれだけ工夫しても、「教えられてばかり」になりがちな児童生徒は存在するからです。

それを比較的簡単に解消する手だての一つが、「異年齢交流」という形の集団体験です。取組内容を配慮すれば、年長者側の児童生徒全員が「お世話をした」「お世話ができた」という体験を持つことができます。年長者側にとっては当たり前で負担が少ない活動、年少者側にとっては未知の活動（例えば「新入生に校歌を教える」）を設定するのがコツです。

なお、活動を設定する際には、一般に児童生徒が楽しいと感じやすいもの、全員が取り組みやすいものから始めていくことが大切です。いきなり高度なものや、得手不得手の差が大きなものにチャレンジさせること、成果が感じとりにくいものや、やたらと疲れるものなどは避けましょう。うまくいく活動が組めたなら、毎年、同じ活動をすることで構いません。教師にとっては、毎年、同じことの繰り返しに思われても、当該学年の児童生徒にとっては初めての体験なのです。その年度の中での発展や成長があれば十分です。

また、こうした交流を、どの程度の頻度で、どの程度の期間にわたって実施するのかということも重要です。単発の活動や途切れ途切れの活動では、せっかくの自己有用感も低下してしまいます。年間計画の中で無理のない、しかし十分な回数と期間を設定します。その際、最も重要なことは、交流活動をリードする側の年長者全員に、十分な準備や工夫ができる時間を確保することです。時間がないからといった理由で、休み時間や放課後に準備させたり、一部の代表者だけを集めて準備させる、といった方法は好ましくありません。実施回数を減らしても、準備や振り返りの時間は確保しましょう。

最後に、教師の共通理解は、何よりも必要なものです。「自己有用感」獲得のための交流活動であることをきちんと自覚しないまま、ただやらせている、思いつきで児童生徒を指導しているということでは、効果は期待できません。児童が成長する見通しを持って、それを励まし促すような働きかけを行っていくことが、教師に求められる働きかけ方です。

※詳しくは、『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」—活動実施の考え方から教師用活動案まで—』（国立教育政策研究所生徒指導研究センター『生徒指導支援資料3「いじめを減らす」』所収 <http://www.nier.go.jp/shido/shienschiryuu/index.html>）を参考にして下さい。

★当センターで作成した調査研究報告書等一覧：<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/3.htm>



文部科学省  
国立教育政策研究所  
National Institute for Educational Policy Research

編集 生徒指導・進路指導研究センター  
TEL 03-6733-6880  
FAX 03-6733-6967  
初版発行 平成24年9月  
部分改定 平成27年3月